



円卓会議で進める 0～100歳の 地域包括ケア





円卓会議で進める0～100歳の地域包括ケア

目次

01 __ はじめに

1. 地域包括ケアとは

02 __ (1) 社会背景

04 __ (2) ちた型地域包括ケア

2. 行政に求められること

05 __ (1) 行政の役割

(2) 地域包括ケアの仕組みづくりを促進するツールの紹介

06 __ ツール1 地域の状況見える化シート

08 __ ツール2 円卓会議

3. 円卓会議の事例

10 __ A) 東浦町緒川地区

12 __ B) 半田市岩滑地区

4. 「ちた型地域包括ケア＝0～100歳の地域包括ケア」のまちの全体像

14 __ 半田岩滑地区の事例から

本冊子は両開き式となっています。右からは、市民の方々を対象とした「安心して暮らせる地域づくり」のポイントをまとめました。こちらもぜひご参照ください。

活動編

私たちが進める0～100歳の地域包括ケア

目次

i __ はじめに

I. 私にもチャレンジできる地域活動

ii __ ①居場所づくり

iii __ ②生活支援

II. 地域活動を始めるために

iv __ ①活動が生まれるきっかけを知る・先進事例に学ぶ

v __ ②活動を応援してくれる専門家たちと出会う





はじめに

タイトルである「0～100歳の地域包括ケア」は、本冊子にて説明する「ちた型地域包括ケア」の真髄を表しています。ここには介護保険の始まる以前、1990年から続く知多半島内での「たすけあい活動」の歴史の中で培ってきたノウハウが詰まっています。

知多地域はそれぞれ特性の異なる5市5町（半田市、常滑市、東海市、大府市、知多市、阿久比町、東浦町、南知多町、美浜町、武豊町）で構成されています。今後の人口予測は、大幅に減っていく地域もあれば、増える地域もある一方、後期高齢化率は今後20年でどの地域も大きく上昇していきます。世界に類を見ない超高齢社会のまちづくりに、既存の制度やしきみで対応することはできません。住民一人ひとりの意識と行動を変えていくと同時に、地域にあるさまざまな有効資源がつながり、力を出し合うことが求められています。行政の役割は、これらをコーディネートする「地域マネジメント」を通して憲法に明記された市民の「生存権」を保障していくことです。

本事業では、地域包括ケアを軸とした地域福祉のまちづくりを、地域全体の共通課題として共有するため、主に4つの事業に取り組みました。1つ目は、知多地域全域の大円卓会議の開催。そして、2つ目に、半田市岩滑地区と東浦町緒川地区の2地域における小円卓会議の開催。3つ目に、小円卓地域におけるコミュニティ・アセスメント・ツール「地域の状況見える化シート」の開発。そして4つ目は、本冊子の作成による「ちた型地域包括ケアの啓発・周知」です。

地域包括ケアを、高齢者支援の仕組みと捉えるのではなく、「生活をするに何らかの困難を抱える全世代が暮らしやすいまちづくり」の仕組みと捉え、整備をしていくこと。そのために必要なポイントを本冊子にまとめました。

モデル図(p.14-15)のように、地域住民、NPO、行政、企業など、多様な地域の構成者がそれぞれの役割を担い、「安心して暮らせる地域づくり」に一步でも近づくことを願ってやみません。



1 地域包括ケアとは

(1) 社会的背景

図1 5市5町 将来推計総人口増減割合 [H22年(2010年)を基準]

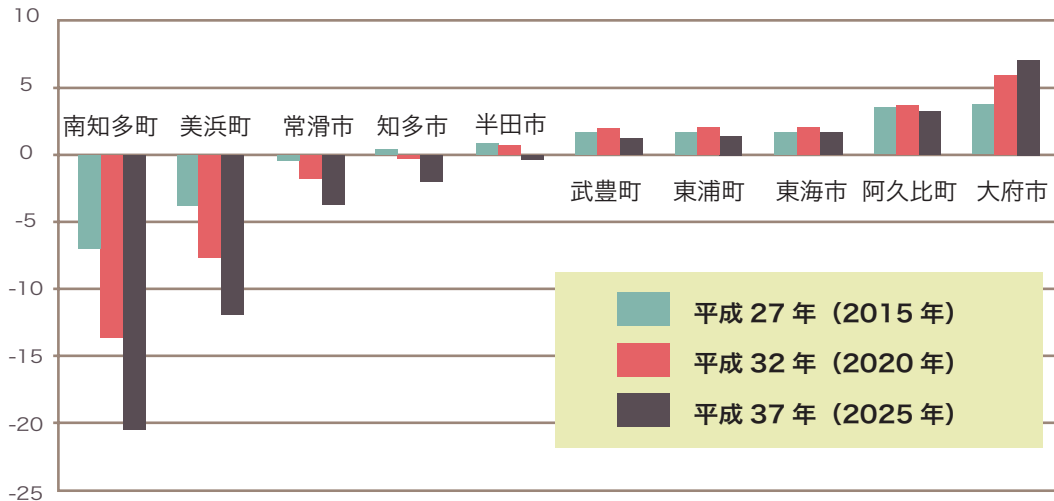
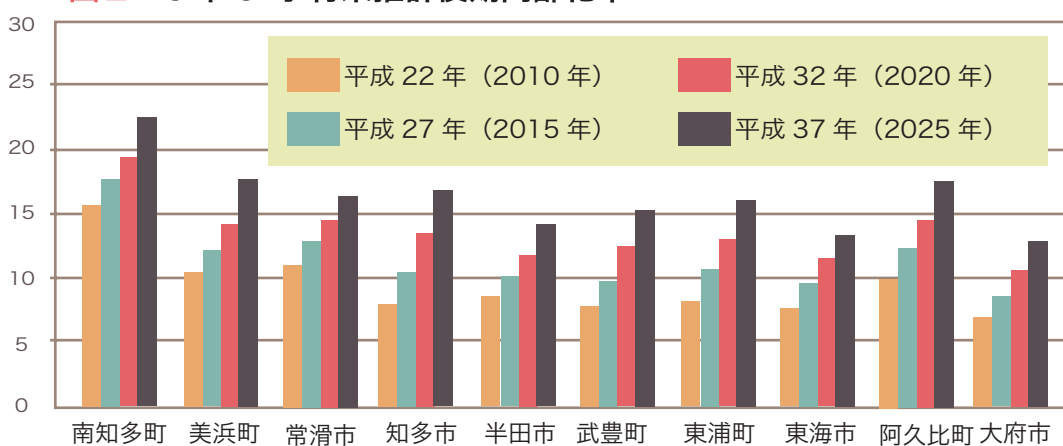


図2 5市5町 将来推計後期高齢化率



資料：あいちの地域包括ケアを考える懇談会「地域包括ケアシステム構築に向けた提言」市町村別将来推計人口より、作成

2025年までの知多地域5市5町の人口、後期高齢化率の推移予測は、図1・2の通りです。人口減少の波にのまれない市町でも、今後は急速な高齢化の影響が懸念されています。単身高齢者のみの世帯や老夫婦

のみの世帯、認知症の増加により、介護が必要な高齢者の在宅生活は一層困難を極めることになります。そこで、国が提唱しているのが、「地域包括ケアシステム」の構築です。

図3 地域包括ケアシステム



地域包括ケアシステムは、図3のような、医療と介護、予防、生活支援サービス、住まいを切れ目なく一体的に提供するしくみのことです。愛知県では、2014年1月に、同システム構築に向けた提言を「あいちの地域包括ケアを考える懇談会」がとりまとめました。懇談会開催による2013年「愛知県地域包括ケア推進研究会」には、本法人も委員として参加し、結果として介護予防になっていく「地域活動・ボランティア活動」と生活支援サービスの提供である「たすけあい活動」が、システムの成否を握ること、福祉NPOのこれまでの実践が地域の土壌を耕してきたことを伝えました。

懇談会の提言

- ① 公的な制度だけで賄うことは困難、自助、互助を含め、地域全体で支え合う「地域包括ケアシステム」は、まちづくり、地域づくりそのものである
- ② 愛知県は、都市部から山間部まで地域差が大きく、システム構築は社会資源や高齢化の状況と、地域実態に合った形で作り上げていくべきである
- ③ 住民参加の元に構築しつつ、システムについての普及啓発を行っていく

(2) ちた型地域包括ケア

懇談会の提言③「住民参加の元に構築する」という点について、知多地域では1990年から地域住民の手による生活支援サービス＝「たすけあい活動」を行ってきています。2000年の介護保険制度施行までの10年間で知多地域の5市4町には11のたすけあい活動団体が生まれました。

支援の対象は、高齢者、障害のある人、

子育て家庭に及び、2000年以降、不登校やひきこもり、不就労など子ども若者にかかわる課題が大きくなってくると、その家庭を支援する団体も生まれています。市町を超えた支援団体同士の広域のネットワーク交流を経て、現在では各市町ごとの関連団体、行政、社会福祉協議会などとの連携を進めています。

ちた型地域包括ケア＝ケアしあうコミュニティづくり

全世代を地域資源ネットワークで支える



市民の「困ったときはおたがいさま」という思いから始まった「たすけあい活動」が実践してきたのは、今はまだケアが必要ではないが、いずれ必要になるかもしれない市民が、現在ケアに必要な全世代を支援

する地域福祉の取り組みであり、「ケアしあうコミュニティづくり」です。これを私たちは「ちた型地域包括ケア」（＝「0～100歳の地域包括ケア」）と呼びます。

2 行政に求められていること

(1) 行政の役割

このような住民参加の先駆的な取り組みが、福祉NPOが存在する一部の地域にあるだけでは、市町ごとの地域包括ケアは実現できません。これらの取り組みをモデルと

して、他の地域に広げ、まち全体の動きにつなげていくことが、行政の担うべき役割です。その際、最も重要なのは、地域包括ケア推進の方針を決定していくことです。

事例

福祉 21 ビーナスプラン（地域福祉計画）

茅野市では、第1次福祉21 ビーナスプランにおける保健福祉サービスセンターの機能と役割が既に地域包括ケアを目指したものであり、高齢者を含めたすべての人に対して生涯にわたった支援ができるよう「総合相談支援システム（地域包括ケアシステム）」という名称で定着を図ってきました。

第2次福祉ビーナスプランでは、「自助」「共助」「公助」という3つの支えをバランスよく整えることにより、さらに一人ひとりの「願い」にかなう地域包括ケアシステムを定着させていきます。

茅野市のように、行政はまず

- ① 地域包括ケア推進方針を定め
- ② 人口構造や社会資源・機能の異なる行政区等の単位ごとに、住民ニーズや資源を把握し、
- ③ その地域に適した仕組みを検討し

施策を展開していく必要があります。

そこで、提案したいのが二つのツールです。

ツール1 地域の状況見える化シート

ツール2 円卓会議



(2) 地域包括ケアの仕組みづくりを促進するツール

ツール1 地域の状況見える化シート

<地域の状況見える化シート作成の目的>

0～100歳の地域包括ケアのための地域資源を把握する

「ケアしあうコミュニティづくり」について、コミュニティの現状を把握し、まずは住民の自助・互助（本人、家族、近隣、友人、親せき等）、介護保険や医療保険などの共助、そして生活保護などの公助が充

足しているのかどうか？充足していたとしても、今後10年の人口変化に耐えうるのかどうか？足りない支援は何なのかを把握する必要があります。

?? シート作成のエリアは? ??

今回の介護保険改正で市町村ごとに「新地域支援事業」を立てることになりますが、介護保険では「日常生活圏域」をそれぞれの市町で「中学校区」など独自に定めています。今回、本法人でシート作成や円卓会議を行ったのは、小学校区域です。これは、介護予防や生活支援サービスを住民主体で生み出す場合、「歩いて行ける範囲」が最適だと考えるからです。

これまでのコミュニティ活動（スクールガードや防犯パトロール、防災訓練、盆踊り、まつり、敬老会、三世代交流、文化祭など）を、「見守り隊」「おたすけ隊」など、住民互助の生活支援のしくみづくりに発展させ、行事遂行型から課題解決型へコミュニティのありようを変えていくこと、すなわち「ケアしあうコミュニティ」への転換が求められています。



地域の状況見える化シート

そのエリアに、

- ① 支援の必要な人がどれだけいて（今後10年でどれくらい増えて）
- ② 現在どんな活用できる場やサービスがあって
- ③ 足りない資源は何か

を、把握する

今回モデル円卓会議を行った半田市と東浦町では、上記の情報のデータベース化に取り組みました。「地域の状況見える化シート」として、他の地域でも作成を試みていただくことを強くお勧めします。その地域で暮らす住民自身が、まつりや地域イベント、店舗や公園、公共施設を「ケアしあうコミュニティ」の地域資源として捉え直す

契機となるためです。「介護予防」や「生活支援」が特別なもの、誰かに与えられるものとして捉えるのではなく、元気なところから慣れ親しんだ生活の一場面、「まちづくり」や「地域づくり」の一環として創出できるように働きかける必要があります。



データベース化の例：東浦町 地域の状況見える化シートの一部

地域の状況見える化シート [東浦町緒川区]

2014/12/19

	項目	データ	概要	介護予防	生活支援	キーパーソン
基礎情報	1. 人口	8,642人				
	2. 面積	8.87km				
	3. 高齢化率	23.2%[H25.10/31 現在]				
	4. 後期高齢化率	10.9%				
	5. 独居高齢世帯率	11.0%[H26.8/8 現在]				
	6. 老々世帯率	11.2%[H26.8/8 現在]				
	7. 産業別就業率	H22 国勢調査・町全体	第1次 244人、第2次 2220人、第3次 6865人、その他 494人			
観光スポット	入海神社	弟橋姫命、夜泣き石、おまんこ祭り		ガイドボランティアウォーキングコース		
	入海貝塚	縄文早期末 700年ごろの貝塚、国指定文化財				
	乾坤院	緒川城主水野家の菩提寺、1475年創建				
	於大公園	平成5年から10年かけて作られた公園、於大まつり				
	緒川城址	1475年ごろ初代水野定守が創建。以下7代130年水野家の居城。徳川家康の生母於大の方の誕生地				



ツール2 円卓会議

<円卓会議の目的>

地域住民の主体性を引き出し、新たな協働プラットフォームやその基礎の形成を促す

地域資源の現状を把握した後は、不足している資源の開発を促す仕掛けが必要となります。しかし、サービスとして十分な対価を得られにくい場合など、担い手は簡単に現れません。一方、地域内には「住んでいるまちのために何か役立ちたい」と考え

ている人材や組織が必ず存在しています。そのような志のあるキーパーソンたちを見つけ出し、円卓会議を開催することで、課題の共有や互いの強みを理解し合うことができ、課題解決へ向けた協働プラットフォーム形成につなげることができます。

円卓会議の進め方

① 目的（テーマ）の設定

地域包括ケアを軸としたテーマを設定します。エリアは地域の状況見える化シート同様、小学校区以下が適切です。

② 参加者の選定

設定したテーマの意思決定に欠かせない当事者や関係者を選定します。人数は10名前後が好ましいです。

③ 会議の準備と進行

各回のプログラム立案や進行を担うファシリテーターと協力して進めます。

④ まとめと公開

各回プログラムの結果及び全体の結論をまとめ、公開します。

⑤ 結果の活用

円卓会議から生まれたアクションを見守り、伴走支援をしていきます。

※円卓会議の進め方については、冊子「地域が変わる 地域円卓会議を開いてみよう！」（発行者：愛知県）を参照ください。

地域が変わる 地域円卓会議を開いてみよう！  で検索

本事業で実施した東浦町緒川地区及び半田岩滑地区の 円卓会議の特徴まとめ

	東浦町	半田市
目的	地域包括ケアのまちづくりのための協働プラットフォームづくり	すでにある地域内協働プラットフォームのさらなる拡大・巻き込み
参加者	毎回同じメンバーで開催	各回のテーマに沿った関係者で開催
オブザーバー	メンバー所属団体のスタッフや調査研究のための大学生	別の回の円卓メンバーや関係者が毎回参加
プログラム	目的に向かって各回のプログラムを積み重ねていく	毎回異なるテーマを設定し、プログラムを進めていく
成果	協働プラットフォーム（チームにじ）が立ち上がる	協働プラットフォームが拡大し「共育」ネットワークが立ち上がる

円卓会議の手法をうまく使えば、「ケアしあうコミュニティづくり」に向けた地域主体の協働プラットフォームを立ち上げることも可能となります。東浦町の場合は、まさにそのような結果を生み出しつつあります。

また、半田市のように、すでに地域コミュ

ニティ内の協働プラットフォームが形成されている場合でも、まだ協働できていない地域資源と新たにつながるきっかけづくりとして活用することもできます。

このように、円卓会議を開催する場合は、地域の現状に合わせて目的やプログラムを設計することが重要です。



3 円卓会議の事例



事例 A

東浦町緒川地区

全体テーマ

「誰もが安心して地域で暮らせるための、住民主体の連携体制づくり」

日程とテーマ

第 1 回	8 月 25 日 (月) 10:00 ~ 12:00	「町の問題とお互いの取り組みを知ろう！」 課題共有とメンバーの相互理解を深める
第 2 回	9 月 10 日 (水) 18:00 ~ 20:00	「どんな連携が可能か考えよう」 連携のアイデア出しと優先順位付け
第 3 回	10 月 4 日 (水) 14:00 ~ 16:00	「初めの一步を踏み出そう」 役割分担と実践計画づくり

会場

NPO 法人絆 風ハウス（知多郡東浦町大字緒川字北赤坂 35 番地の 1）

円卓メンバー

- ・ 東浦町健康福祉部福祉課 社会福祉係長
- ・ 高齢者相談支援センター（地域包括支援センター）主任ケアマネージャー
- ・ 医療法人昭新会 訪問看護ステーショングラシア 管理者
- ・ 民生委員児童委員協議会 会長
- ・ 東浦サロン連絡会 会長
- ・ トーエイ(株) 営業課
- ・ 社会人学生
- ・ NPO 法人絆 事務局長

全体テーマ

NPO 法人絆は、1994年東浦町にて「東浦くらしのたすけあい絆」として立ち上がりました。知多地域で4つ目となる住民参加型の福祉サービス団体として発足し、現在は、たすけあい事業、介護保険事業、障害福祉事業、配食サービス事業、ヘルパーステーション、福祉有償運送等を提供しています。20年以上に渡る活動の中で地域住民や行政、社会福祉協議会等の理解は進んで来ましたが、組織同士のネットワーク化までには至っていませんでした。

そこで、円卓会議を開催しネットワークの基盤づくりをすることになりました。参加者がそれぞれの取り組みについて語り合いをして、地域に十二分の社会資源があることを共有しました。しかし、それぞれが「自己完結型」で、相互に情報共有する仕組みがないことなどもわかりました。そのように現状を把握したところで、地域課題の整理を行っていききました。そして、3回目にはみんなで一緒にイベントを開催する提案が出され、「チームにじ」が立ち上がりました。

参加者の声

東浦町では、いろいろな団体や機関がそれぞれ頑張っています。でも、なかなか一緒に手を組んで取り組むことはありません。そこで、東浦町の福祉や連携を考える円卓会議に参加したメンバーを中心に、「チームにじ」は立ち上がりました。

構成は、民生委員、ふれあいサロン、訪問看護ステーション、行政、地域包括支援センター、NPOなど、いろいろな職種の人たちです。「地域でできることは何か？」を考え、「みんなでやればできる」を合言葉に、「地域づくり」の具体的な事業につなげていきたいと思っています。

チームにじ 代表 杉浦政代

後日談

NPO法人絆では、2015年2月21日に東浦文化センターにて「であいふれあいささえ愛 みんなでつくる あしたの東浦」というイベントを開催しました。認知症啓発の映画上映会を中心に、市民劇団や、まちの保健室、子育てひろばなど「チームにじ」のメンバーが大活躍し、大盛況のイベントとなりました。





事例B

半田市岩滑地区

全体テーマ

「誰もが安心して地域で暮らせるための、住民主体の連携体制づくり」

日程とテーマ

第1回 10月20日(月) 18:00~20:00 食 ~買い物支援~

第2回 11月15日(土) 18:00~20:00 医療 ~在宅支援~

第3回 12月15日(水) 18:00~20:00 教育 ~次世代育成~

会場

NPO 法人りりん事務所 1階 (半田市岩滑高山町5丁目4)

円卓メンバー

- ・半田市福祉部 地域福祉課 地域福祉担当
- ・半田市子育て支援センター
「はんだっこ」 指導保育士
- ・半田市包括支援センター 介護支援専門員
- ・やなべお助け隊 隊長
- ・株式会社スギ薬局 薬剤師
- ・NPO 法人りりん
- ・株式会社トラム (パンのトラ) 開発部
- ・すみれ訪問看護ステーション
- ・たのうえ接骨院
- ・岩滑地区主任児童委員
- ・半田市立岩滑小学校 校長
- ・NPO 法人共育ネットはんだ 理事長
- ・元コンビニエンスストア従業員

※円卓メンバーは毎回8~9名で開催。毎回参加するメンバーと関係するテーマの回のみ参加するメンバーがいた。

円卓会議の流れ

NPO 法人りんりんは、1994年、半田市にて「半田市在宅介護・家事援助の会 りりん」として立ち上がりました。現在は、半田市岩滑地区に拠点を置き、たすけあい事業、地域ふれあい事業、介護保険事業、障がい福祉サービス事業、放課後児童クラブなどを運営しています。

2012年から岩滑地区や地域包括支援センターと一緒に「ごんの灯りプロジェクト」という独居高齢者の見守り活動にも取り組んできました。他にも防災活動や観光イベントなど地域との連携をいくつも重ねてきたことで、地域包括ケアを進めるために必

要なネットワークの基盤がすでにできている状態でした。

今回は、そのネットワークをさらに広げるため、すでに岩滑地区の地域課題として捉えられている3つのテーマを掲げて開催することにしました。さらに、毎回同じメンバーで開催するのではなく、テーマに合わせて地域で事業を営んでいる店主や、小学校の校長先生など多様な関係者に円卓メンバーとして参加していただきました。その結果、新たな地域のつながりができ、円卓メンバー同士の連携を強化することができました。

参加者の声

地域包括ケアは、急増する高齢者福祉の視点から発案されたものですが、実は高齢者のためだけに必要なわけではありません。まちに暮らす赤ちゃんから小中学生・若者・そして長く暮らしてきた高齢者まで、すべての世代にかかわっていくことであり、つまり「まちづくり」そのものだと改めて確認できました。

「あれっおかしいなあ・・・あのお客さん」「あれっ、あのおじいちゃんはなんであんな所にいるのかな？」と子どもが気づいたら、「ここに伝えるんだよ」とみんなにわかる拠点（窓口）がある。また「隣のS君じゃないか、どうした？」と大人が子どもに声を掛ける。世代を越えて見守りし合う。それぞれに役割を持つことは、包括ケアにもまちづくりにも不可欠だと思います。

医療や介護のプロだけでは包括ケアはできません。「小学校応援隊」「お助け隊」と、円卓会議でできたご縁を繋げてまちづくりを進めていきたいです。そしてりんりんが、「ここに伝えるんだよ」のその拠点になれますように・・・。

特定非営利活動法人りんりん 代表 下村裕子

4

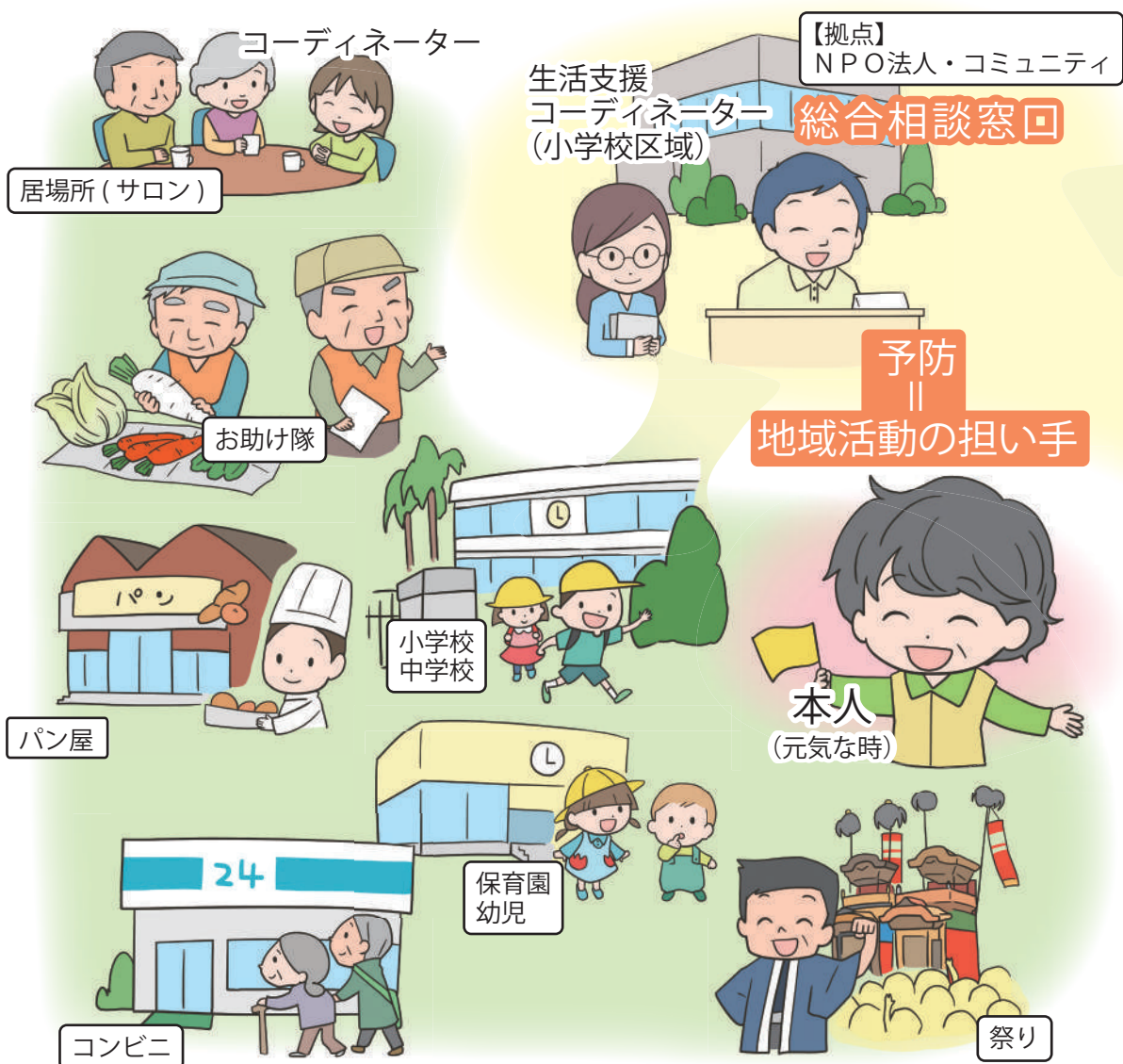
& III

「ちた型地域包括ケア＝0～100歳の地域包括ケア」の まちの全体像（半田市岩滑地区の事例から）

半田市岩滑地区で開催した円卓会議の結果、「ちた型地域包括ケアモデル」の全体像が明らかになってきました。

元気なうちは地域活動に関与し、誰かの支えが必要になったらこれまでの関わりをもとに在宅のまま自分らしく生きていける

まちづくりを目指していくこと。そのためにも、介護保健制度や医療制度などの公的な支援だけでなく、地域にいる一人ひとりが、役割を持ち合い、支え合っていくことが必要だとわかりました。



生活支援

着る ・洗濯



楽しむ ・移動
・コミュニケーション

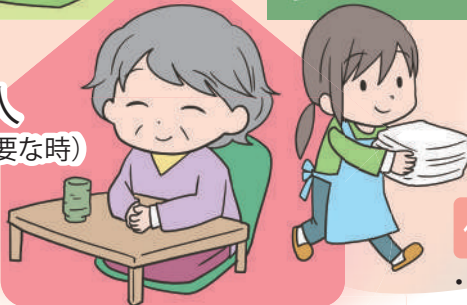


食べる ・つくる
・片付ける



本人

(支えが必要な時)



住む

・片付ける

医療

薬局
かかりつけ医
訪問看護
認知症診断の専門医



はんだまちづくりひろば

市民活動の協働拠点

経済振興

観光振興

社会福祉協議会

全市の総合
相談窓口

介護

ケアマネージャー
地域包括支援センター

ちた型地域包括ケアの3つのポイント

1

NPO やコミュニティが、地域の身近な総合相談窓口として機能する。

→小学校区に一つある、地域包括支援センターランチとして機能する。

2

地域として、丁寧に子どもと関わっていく場やつながりを持っている。

→孤立しがちな子育て世帯を地域で支え、幼少期の愛着形成を促すことで、最終的に高齢者虐待をなくすことができる。

3

行政が全体をコーディネートして、地域づくりが行われている。

→それぞれの得意分野を生かしながら、地域全体の主体性を上手に引き出す仕組みが作られている。

Ⅱ. 地域活動を始めるために

2 活動を応援してくれる専門家たちと出会う


おたすけ隊の生まれるきっかけを見ると、「まちづくり会議」や「ふくし井戸端会議」のような、住民参加のワークショップ（話し合いの場）を企画運営した行政や社会福祉協議会、福祉 NPO 法人関係者の存在が共通しています。

今後、小地域における居場所や生活支援サービスの担い手はますます必要となります。そのために、活動をサポートし、継続できるように団体立ち上げを応援してくれる人たち（コーディネート機関）の存在も重要となってきます。

活動を応援してくれる専門機関（コーディネート機関）

機関名	期待される機能
福祉 NPO 法人 中間支援 NPO 法人 社会福祉法人(施設) 地域包括支援センター 市民活動センター 社会福祉協議会 行政福祉担当課 行政協働担当課	各市町の総合計画、高齢者保健福祉計画、介護保険事業計画、障害者福祉計画、児童福祉計画、地域福祉計画、住生活基本計画等に基づいた「地域包括ケアのまちづくりビジョン」を明示し、「地域包括ケア推進計画」を作成、住民主体の活動が立ち上がるような①地域課題を共有する場の設定、②立ち上げ・運営支援、③担い手育成、④他団体とのネットワーク化を推進する

さわやか福祉財団では、「新地域支援事業 助け合い活動創出ブック」を2014年9月に発行、HP上で公開しています。資源開発の事例やネットワーク化について豊富な情報がまとめられています。

新地域支援事業 助け合い活動創出ブック  で検索



応援してくれる人たちがいるのはとても心強いわ。一度、私も相談してみようかしら。

はい、一緒に考えましょう。



Ⅱ. 地域活動を始めるために

1 活動が生まれるきっかけを知る・先進事例に学ぶ

このような、居場所づくりやおたすけ隊の活動など、住民発のたすけあい活動を、小学校区や町内会など小地域ごとに生み出すためにはどうしたらよいでしょうか？前ページの4つのグループが生まれるきっか

けを伺いました。

こうやって先進事例に学ぶことはとても大切なことです。仲間と一緒に見学に行ってみましょう。

団体名

南粕谷おたすけ隊

設立者が知多市第三次地域福祉計画策定にかかる住民参加のまちづくり会議に参加した際、改めて自分の住む南粕谷が市内でも群を抜いた高齢化の進む地域であることを知り、かつその場に地域の障がい当事者が参加しており、困っていることを直接耳にしたことから、立ち上げを決意した。

設立のきっかけ

二管ふれあい

福祉 NPO 法人の 4 代目代表理事を務めた設立者が、代表交代後に自分の居住区で老人会役員に声を掛け、仲間づくりを経て設立。NPO でのたすけあい活動・団体運営経験が地域で生かされている。

亀崎思いやり応援隊

半田市と社会福祉協議会が主催する「ふくし井戸端会議」（地域の困りごとを把握し、その解決方法を地域住民、行政などの関係機関と話し合う場）で、地元のスーパーが閉店したことをきっかけに、支援の必要な方を対象として、半年の準備期間を経て設立。

やなべお助け隊

日本生命財団助成を受け、コミュニティ、福祉 NPO 法人、社会福祉協議会が共同し「防災から安住のまちづくり」事業を推進、全世帯アンケートやワークショップで「高齢世帯が住みよいまちづくりを」との声を聞き、南粕谷おたすけ会を訪問、参考にしながら設立した。



どうやってみんな始めたのだろう。
よし、仲間と見学に行ってみよう！

I. 私にもチャレンジできる地域活動

2 生活支援

かつてNPOが始めた生活支援の有償ボランティア「たすけあい活動」が、現在では地縁型組織の中でも「おたすけ隊」などの名称でグループ運営されるようになっていきます。

有償ボランティア「たすけあい活動」

- 仕組み** ボランティアによる生活支援サービス提供に対し、謝礼金を支払う
- 活動内容** ゴミ出し、電球の取替え、庭の草取り、病院への送迎、買い物支援等の簡単な家事援助
- 謝礼金** 提供されるサービスの対価として支払われるものでなく、無償の労力提供に対し「謝意」を表すために支払われる

有償ボランティアは、助けられる側の「無償では申し訳ない」という思いと助ける側の「お金が欲しい訳ではないが、もらえたらうれしい。また続けたい」という、対等性が担保され、活動が継続できるメリットがあります。どんな内容の活動をいくらで行うかは、その地域事情を踏まえて、住民が話し合っ

て納得できる金額を決定することがよいでしょう。また、似たくみにシルバー人材センターがありますが、もう少し住民が気軽に依頼できる軽度な作業の担い手として期待されています。知多地域の4事例の概要を挙げてみました。なお、これらの担い手は無償で活動しています。

	南粕谷おたすけ会 (知多市)	二管ふれあい (知多市)	亀崎思いやり応援隊 (半田市)	岩滑お助け隊 (半田市)
設立	2007年4月	2014年4月	2012年5月	2013年4月
会員数	62人	15人	56人	37人
対象地域	南粕谷小学校区	つつじヶ丘 2丁目町内会	亀崎地区	岩滑小学校区
活動内容	困ったとき気軽に頼め、住民が助ける(病院送迎、家屋補修、庭木剪定、家財廃棄、PC指導等)	・高齢者、障害者の生活支援(家具移動、電気取替え、大工仕事、通院や買い物送迎、資源回収、PC指導等) ・なごみサロン	・独居高齢世帯または老々世帯の困りごとに対応(家屋補修、庭木剪定、草刈) ・通学路の安全確保 ・買い物便利帳(出前・宅配)	・健康上の都合で出来ない軽作業(側溝清掃、粗大ゴミの処理、戸車交換) ・困りごと相談
利用料	100円/30分 200円/60分	100円/60分 30分超える毎100円を加算	500円/1回 30分～60分	500円/1回

I. 私にもチャレンジできる地域活動

写真：南粕谷ハウス

1 居場所づくり

知多地域で始まったたすけあい活動は「地域の居場所づくり」を実践してきました。



これは、

- ① いつでも誰でも気軽に寄ることができる
- ② お茶を飲み、世間話ができる
- ③ 運営者にも利用者にもなることができる

という3つの機能が特徴のコミュニティ・カフェです。

独居高齢者のひきこもり防止や介護予防、生きがいづくりにもつながります。

このような居場所に、高齢者だけでなく、

障害のある人も子育て中の女性や男性、放課後の子どもたちも集まるようになれば、多世代で支え合う地域の交流の場になると共に、住民にとって気軽に何でも相談しあえる「総合相談窓口」になっていきます。

知多地域では、下記のような**常設型の地域の居場所**を展開しています。

- ・大府市：NPO法人はっぴいわん大府の4つの居場所
- ・半田市：NPO法人りんりんの「りんりん茶屋」
- ・常滑市：NPO法人あかりの「街かどサロンきらり」
- ・知多市：南粕谷コミュニティの「南粕谷ハウス」
- ・知多市：つつじが丘3丁目町内会の「つつじが丘3ハウス」
- ・半田市：岩滑地区の「やなべふれあいセンター」など4箇所の地域ふれあい施設

こんな場所があるのね。
私にもできるかしら。



はじめに

～まちづくりの担い手は誰なのか～

高度経済成長は遙か昔。私たちは今、人口減少超高齢少子化という大きな課題を抱えた社会の中で暮らしています。これまでは、私たちの住む地域で問題が起こった時、私たちは問題を市役所の人や、議員さんや、偉い先生や…といった人が「解決してくれるだろう」と思ってきました。

しかし、もはやそれでは立ち行かない時代になっています。地域や社会の問題は、私たち一人ひとりが自分の問題として捉え、取り組んでいかななくては、誰にとっても「安全・安心」な暮らしを実現することはできません。このまちのことを一番よく知っているのは、他でもない、このまちに住む「わたしたち」です。このまちを、どんなまちにしていきたいかを決め、これからのまちをつくっていく行動を起こすのは、まちに暮らす「ふつうの人」である、私たちです。

あらゆる人に居場所があり、役立ち感を得られる地域を目指して、すでに自分たちで新たな取り組みを始めた先輩が地域に多く存在しています。この冊子では、20年以上前から地域に住むふつうの人たちが「自分たちの力で、自分たちの住む地域に必要なものを作っていこう」と活動してきた愛知県知多地域での活動を例に、これからのまちづくりのヒントを紹介しています。

「私たちも何かできないかな」とこの冊子を手にとってくださったあなたにも、きっとできることがあるはずです。まずはあなたの想いを共有できる仲間を見つけ、語り合ってみてください。たとえ支えられる側になったとしても、安心して暮らせるまちであってほしい。そういう一人ひとりの思いと行動の積み重ねで、まちは必ず変わってきます。あなたも担い手の一人になってみませんか。



私にもなにかできないかしら

これからは地域のために活動をしたいけどどうしたらいいかな





私たちが進める0～100歳の地域包括ケア

目次

i __ はじめに

I. 私にもチャレンジできる地域活動

ii __ ①居場所づくり

iii __ ②生活支援

II. 地域活動を始めるために

iv __ ①活動が生まれるきっかけを知る・先進事例に学ぶ

v __ ②活動を応援してくれる専門家たちと出会う

III. 「ちた型地域包括ケア＝0～100歳の地域包括ケア」のまちの全体像 半田岩滑地区の事例から

平成 27 年 3 月 7 日発行

発 行 者 特定非営利活動法人 地域福祉サポートちた
〒 478-0047 愛知県知多市緑町 12-1 知多市市民活動センター 1 階
電話番号 0562-33-1631 E-mail spchita@ams.odn.ne.jp

執 筆 者 岡本一美、伊東かおり
構成・イラスト 川合里美、山本彩乃
監 修 原田正樹 日本福祉大学 社会福祉学部教授



本冊子は、平成 26 年度公益信託 愛・地球博開催地域社会貢献活動基金の助成を受けて作成しています。

私たちが進める
0～100歳の
地域包括ケア

